

## 生命科学部

## I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2022年度大学評価結果総評】(参考)

生命科学部の自己点検・評価については、前年度までの良好な取り組み状況を安定的に継続しており、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員組織、学生支援、教育研究環境、社会貢献・社会連携といったそれぞれの方向に対して着実に学部運営を進めていることが見てとれる。中でも、教養教育と専門教育の連携についての検討が進められ、基礎教育のカリキュラム改革へと進展している点は注目に値する。インタビューによると、各種課題とそれらへの対応は新旧執行部で引き継ぎがなされているとのことで、全般的に従来の良好な取り組みは安定的に継続されており、着実な取り組みに根ざした次の改革の兆しも見えていることから、今後も着実に教育改革を進めていかれるものと考えられる。

## 【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

大学評価委員会の評価結果は執行部で検討し、学科主任を通じて各学科に展開し、さらに教授会で報告し全教員へ周知することで、学部内で共有している。これまでの取り組みが評価されている教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員組織、学生支援、教育研究環境、社会貢献・社会連携について、引き続き適切な対応を進める。学生支援のさらなる向上について、外国人留学生に向けた修学支援の呼びかけや教員とコミュニケーションをとるための施策を検討する。また、前年度まで検討を続けてきた教養教育と専門教育の連携、特に基礎教育のカリキュラム改革について、今年度よりリメディアル科目(入門数学、入門物理学、入門化学、入門生物学)を新規開講したことから、これらの科目の教育効果の向上に向けた検討を続ける。以上の内容を反映した年度目標を設定した。

## II 自己点検・評価

## 1 教育課程・学習成果

## (1) 点検・評価項目における現状

## 1.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

## 1.1①授与する学位ごとに、学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)を記入してください。

生命科学部は、以下の能力を備えた学生に学位を付与する。

1. 英語科目、教養科目、理系教養科目単位を修得し、幅広い知識を有する。
2. 学部内の共通専門科目の履修を通じて生命科学および化学の学際的知識と総合的視野を有する。
3. 専門実験・実習科目を履修し実践的な課題解決能力を有する。
4. 卒業研究、課題研究を履修しコミュニケーション能力、問題解決能力を備える。

各学科で授与する学位およびディプロマ・ポリシーは次の通りである。

<生命機能学科：学士(生命科学)>

1. ゲノム・タンパク質・細胞を中心とする専門的知識を身につけた上で、生命科学の総合的理解ができる。
2. 広い学問的視野、論理的思考能力、実践的な課題解決能力を備えている。
3. 日本語、英語を問わずに情報を収集し、自立的に考え、それを論理的に説明できる能力を備えている。

<環境応用化学科：学士(理学)>

1. 化学に関する専門知識の習得とそれを生かした問題解決能力を備えている。
2. 化学に関する実験操作を自ら行い、その結果を正当に評価し、論理性ある結論が導きだせる能力を備えている。
3. 日本語、英語を問わずに豊かなコミュニケーション能力を備え、自らの意見を論理的

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>に説明できる能力を備えている。</p> <p>&lt;応用植物科学科：学士（生命科学）&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>様々な植物病について、的確に診断・予防・治療できるための専門的知識とその遂行能力が備わっている。</li> <li>食の安全や環境についての知識を持ち、植物保護の技術を理解しリスク評価を行える総合的能力を有する。</li> <li>専門教育で得た知識を活用し、さまざまな分野で新しい科学や技術が現代社会に与える影響を自らの力で正しく評価し、その内容の正確な伝達ができる説明能力が備わっている。</li> </ol>	
1.1②上記のディプロマ・ポリシーには、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果が示されていますか。	はい
1.1③上記のディプロマ・ポリシーを公表していますか。	はい
<p><b>【根拠資料】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生命科学部ホームページ <a href="https://www.hosei.ac.jp/seimei/shokai/policy/diploma/">https://www.hosei.ac.jp/seimei/shokai/policy/diploma/</a></li> <li>生命機能学科ホームページ <a href="https://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/diplomap/">https://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/diplomap/</a></li> <li>環境応用化学科ホームページ <a href="https://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/subject/">https://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/subject/</a></li> <li>応用植物科学科ホームページ <a href="http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/diplomap/">http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/diplomap/</a></li> </ul>	

1.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

1.2①授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を記入してください。
<p>生命科学部では、以下の特色を持つ教育課程を編成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>初年次教育として自立性やプレゼンテーション能力を涵養するための科目を設定する。</li> <li>英語科目、教養科目、理系教養科目の単位取得を卒業要件に含める。</li> <li>1年次より専門実験・実習科目を配して、早期より専門性を高める。</li> <li>学部内で共通履修できる専門科目を設け、専門分野での総合的科学者の見地を養う。</li> <li>各学科で学生の興味に合わせた専門性をより高めるべく 3つの履修コースを設定する。</li> </ol> <p>各学科で授与する学位およびカリキュラム・ポリシーは以下の通りである。</p> <p>&lt;生命機能学科：学士（生命科学）&gt;</p> <p>ゲノム・タンパク質・細胞に関連する科目を中心としてカリキュラムを編成し、生命を、個々の生体分子の機能が統合された現象としてとらえ、深く理解できるような専門科目を配置する。また、三履修コースとして、「ゲノム機能」、「タンパク質機能」、「細胞機能」を設け、学生の興味に合わせて高度な専門性を身につけさせる。全体としては次の点に配慮する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>初年次から実験・演習科目を設定する。</li> <li>研究室配属による課題研究・演習の履修を2年次から可能とし、理論・知識と実践的技術の相乗的効果によって高度な専門性の習得を推進する。</li> <li>学部内の教養科目、学科横断的な専門科目の複数の習得を推奨する。</li> <li>教員研修の結果をフィードバックさせ、履修指導や講義の改善を図り、きめ細かく柔軟性のある教育を遂行する。</li> </ul> <p>&lt;環境応用化学科：学士（理学）&gt;</p> <p>化学に関する基礎科目を習得したのち、三履修コースを設け、より専門度を高めるよ</p>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

うカリキュラムを配置する。三履修コースとして、「物質創製化学」、「グリーンケミストリ」、「環境化学工学」を設け、学生の興味に合わせて高度な専門性を身につけさせるとともに、卒業後選択する職業への指針を与えるよう配慮する。カリキュラム全体としては、次の点に配慮する。

- ・ 全学年に実験科目を配し、化学技術者および研究者としての基礎技術を身につけさせる。
- ・ 初年次は、高校からの円滑な移行をはかるための教育およびキャリア教育を行う。3年次には卒業研究のための準備教育を行う。4年次には、卒業研究を課し、社会人、大学院進学への準備を徹底するよう、少人数教育に努める。
- ・ 公的資格取得のための教育にも配慮する。

<応用植物科学科：学士（生命科学）>

植物、微生物と昆虫に関する、分子・細胞生物学からマクロな生態学まで配置し、併せて食料、環境、社会経済問題まで広範に、総合的な知識を修得可能なメニューを配する。特に、植物保護に関わる技術や資格取得のための知識修得の機会を設ける。三履修コースとして、「植物クリニカル」、「グリーンテクノロジー」、「グリーンマネジメント」を設定する。以下の点に配慮する。

- ・ 実験・実習を初年次から開始して、基礎訓練を行い、その後段階的に高度な診断・防除技術を修得するような実践的で、体系的な教育プログラムを設定する。
- ・ 公的資格（技術士補、樹木医補、自然再生士補）の取得プログラムを配置するとともに、植物関連の食料・環境・バイオ関連の企業・公的機関へのインターンシップを行う。
- ・ 関連する法令や制度、国際動向、関連ビジネスについての知識修得の場を設ける。

1.2②上記のカリキュラム・ポリシーには、学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成（教育課程の体系、教育内容）・実施（教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等）方針が示されていますか。	はい
--	----

1.2③上記のカリキュラム・ポリシーを公表していますか。	はい
------------------------------	----

【根拠資料】

- ・ 生命科学部ホームページ <https://www.hosei.ac.jp/seimei/shokai/policy/curriculum/>
- ・ 生命機能学科ホームページ <https://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/curricp/>
- ・ 環境応用化学科ホームページ <https://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/subject/>
- ・ 応用植物科学科ホームページ <http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/curricp/>

1.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

1.3①「法政大学学則」第23条（単位）に基づいた単位設定を行っていますか。	はい
--	----

1.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

1.4①「法政大学学則」第22条の2（履修科目の登録の上限）に基づき、1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	はい
--	----

1.4②学生の履修指導を適切に行っていますか。	はい
-------------------------	----

1.4③学生の学習指導を適切に行っていますか。	はい
-------------------------	----

1.4④学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行っていますか。	はい
---------------------------------------	----

1.4⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	はい
---	----

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

1.4⑥シラバスの内容の適切性と授業内容とシラバスの整合性を確保していますか。	はい
<b>【根拠資料】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生命科学部 教授会議議事録</li> <li>・ 生命科学部 履修の手引き</li> <li>・ シラバス第三者確認</li> <li>・ 生命機能学科 教室会議議事録</li> <li>・ 生命機能学科 学科別ガイダンス資料</li> <li>・ 生命機能学科 卒業論文発表会プログラム</li> <li>・ 生命機能学科 生命機能学セミナー案内</li> <li>・ 生命機能学科 生命機能学実験の手引き</li> <li>・ 生命機能学科 基礎実験 I・II、基礎演習 I・II シラバスおよび予定表</li> <li>・ 環境応用化学科 教室会議議事録</li> <li>・ 環境応用化学科 学科別ガイダンス資料</li> <li>・ 環境応用化学科 卒業論文発表会要旨集</li> <li>・ 環境応用科学科 履修登録予定表</li> <li>・ 環境応用化学科 応用化学基礎、応用化学セミナーシラバス</li> <li>・ 環境応用化学科 基礎応用化学実験、応用化学実験 IA・IB・IIA・IIB テキスト</li> <li>・ 応用植物科学科 教員会議議事録</li> <li>・ 応用植物科学科 学科別ガイダンス資料</li> <li>・ 応用植物科学科 卒業論文発表会講演要旨</li> <li>・ 応用植物科学科 植物医科学基礎実験 I・II、植物生産基礎実習 I・II、植物医科学応用実験 I・II、植物医科学専門実験 I・II、植物医科学インターンシップテキストおよびシラバス</li> </ul>	

1.5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

1.5①「法政大学学則」別表(10)「認定単位の上限」に基づき、既修得単位などの適切な認定を行っていますか。	はい
1.5②「法政大学学則」第17条(卒業所要単位)に基づき、卒業の要件を明確にし、刊行物、ホームページ等のいずれの方法によっても、予め学生に明示していますか。	はい
1.5③成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための措置を講じていますか。	はい
<b>【根拠資料】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生命科学部 教授会議議事録</li> <li>・ 生命科学部 履修の手引き</li> <li>・ シラバス</li> <li>・ シラバス第三者確認</li> <li>・ 生命機能学科 教室会議議事録</li> <li>・ 環境応用化学科 教室会議議事録</li> <li>・ 応用植物科学科 教員会議議事録</li> </ul>	

1.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

1.6①授与する学位ごとに、アセスメント・ポリシーを記入してください。
<p>生命科学部では、学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー(学生の受け入れ方針)、カリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施方針)、ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)の3つのポリシーに照らして、下記のとおり検証を行う。</p> <p>1. 各種入学試験における成績、調査書等の記載内容、面接等を用いて、異なる背景をもって入学した学生が理系科目及び英語について、入学後の修学に必要な基礎的素養を</p>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- 持つことの測定を行う。
2. 教養科目、理系教養科目への取り組みと成果を通じて、基礎・基盤学問分野の素養を有することの測定を行う。
  3. 専門科目、専門実験科目への取り組みと成果を通じて、生命科学及び環境応用化学分野の体系的学識と先端技術に自律的に柔軟に対応可能な専門性を有することの測定を行う。
  4. 卒業論文、ゼミ関連科目、对外発表への取り組みと成果を通じて、学問を貪欲に吸収し、科学技術の進歩を社会に生かそうとする積極性と意欲、さらに物事を論理的に幅広く考察する能力を有することの測定を行う。
  5. 外国語科目、SA への取り組みと成果を通じて、外国語によるコミュニケーションが可能であるとともに、グローバルに活躍できる国際性を有することの測定を行う。
  6. 卒業時アンケート、就職状況、インターンシップ等を用いて、高い倫理観を持って持続可能な社会構築にむけリーダーシップを発揮し貢献できる豊かな人間性を有するか測定を行う。

各学科で授与する学位およびアセスメント・ポリシーは以下の通りである。

<生命機能学科：学士（生命科学）>

生命機能学科では、ゲノム・タンパク質・細胞を中心とする専門的知識、論理的思考能力、実践的な課題解決能力、語学力を基礎とする情報収集能力について、以下の方法により評価する。

1. 生命科学の理解の基盤となる化学・物理・数学などの幅広い科学の素養や英語によるコミュニケーション能力については、カリキュラムに設定した所定の内容を問う試験を厳正に実施し、修学の成果を測定する。
2. ゲノム・タンパク質・細胞を中心とする専門知識については、カリキュラムに設定した所定の内容の習得を厳正な試験によって測定するとともに、研究室における少人数指導において、それらを統合した理解力を身につけているかを指導教員が評価する。研究室における指導の評価基準については教員間の情報交換により、平準化をはかる。
3. 論理的思考能力、実践的な課題解決能力、情報収集能力については、研究室における少人数指導において、研究課題の理解力、遂行能力、国際学術科学雑誌の読解力から指導教員が評価する。評価基準は2と同様に平準化をはかる。

<環境応用化学科：学士（理学）>

環境応用化学科では、学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の3つのポリシーに照らして、下記のとおり検証を行う。

1. 各種入学試験における成績、調査書等の記載内容、面接等を用いて、異なる背景をもって入学した学生が理系科目及び英語について、応用化学を学ぶに十分な基礎的素養を持つことの測定を行う。
2. 教養科目、理系教養科目への取り組みと成果を通じて、応用化学を学ぶに十分な基礎・基盤学問分野の素養を有することの測定を行う。
3. 専門科目、専門実験科目への取り組みと成果を通じて、応用化学分野の体系的学識と先端技術に自律的に柔軟に対応可能な専門性を有することの測定を行う。
4. 卒業論文、ゼミ関連科目、对外発表への取り組みと成果を通じて、学問を貪欲に吸収し、応用化学分野の科学技術の進歩を社会に生かそうとする積極性と意欲、さらに物事を論理的に幅広く考察する能力を有することの測定を行う。
5. 外国語科目、SA への取り組みと成果を通じて、外国語によるコミュニケーションが可能であるとともに、グローバルに活躍できる国際性を有することの測定を行う。
6. 卒業時アンケート、就職状況調査を用いて、高い倫理観を持って持続可能な社会構築

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。



にむけリーダーシップを発揮し貢献できる豊かな人間性を有するか測定を行う。

< 応用植物科学科：学士（生命科学） >

1. 初年次から始まる植物病の診断・防除技術の修得に向けた実験・実習におけるレポート作成や教養科目への取り組みと成果を通じて、主体的、自主的、能動的な学修態度や、学科課程で求める思考力、判断力、表現力等の基礎的学問分野の素養を有することを測定する。
2. 学生の国際性を涵養するための SA や ERP などの英語教育を積極的に推奨し、毎年実施する TOEIC-IP テストや外国語によるコミュニケーション能力等、グローバルに活躍できる国際性の習熟度を測定する。
3. 植物に関係する食料・環境・バイオ関連企業・公的機関でのインターンシップの活動報告を通じて、学生の社会的および職業的自立を図るために必要な専門能力の育成度を測定する。
4. 授業やゼミ等における植物保護および食の安全に関する専門知識と的確な対処能力、関連する法令や制度、国際動向、関連ビジネスなどキャリア教育を通じた専門知識の学修状況を評価し総合的能力の修得状況を測定する。
5. 学生 1 人ひとりへのきめ細かい指導を実現するため、各学生の単位修得状況や GPA さらに資格取得状況等の達成度を全就学期間に渡り定期的に測定する。
6. 卒業論文、単位修得状況、成績評価、各種資格（技術士補、樹木医補、自然再生士補）の取得状況等を用いて、専門的知識とその遂行能力、リスク評価を行える判断能力、および正確な伝達ができる説明能力が身につけているか測定する。

1.6②上記のアセスメント・ポリシーは、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標となっていますか。	はい
1.6③授与する学位ごとに、アセスメント・ポリシーに基づき学生の学習成果を把握していますか。	はい
1.6④学習成果を可視化していますか。	はい

【根拠資料】

- ・ 生命科学部 教授会議事録
- ・ 生命機能学科 教室会議議事録
- ・ 生命機能学科 卒業論文発表会プログラム
- ・ 生命機能学科 基礎実験 I・II、基礎演習 I・II のアチーブメントテスト（統一テスト）
- ・ 環境応用化学科 教室会議議事録
- ・ 環境応用化学科 卒業論文発表会要旨集
- ・ 応用植物科学科 教員会議議事録
- ・ 応用植物科学科 卒業論文発表会講演要旨

1.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

1.7①授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	はい
1.7②大学評価室による学生調査結果（入学前アンケート・1年生アンケート・卒業生アンケート）を組織的に利用していますか。	はい

【根拠資料】

- ・ 生命科学部 教授会議事録
- ・ 生命機能学科 教室会議議事録
- ・ 生命機能学科 アンケート調査
- ・ 環境応用化学科 教室会議議事録
- ・ 環境応用化学科 アンケート調査
- ・ 応用植物科学科 教員会議議事録

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

・ 応用植物科学科 アンケート調査
-------------------

## (2) 特色・課題

以下の項目の中で、学部として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを選択し、記入をしてください。

【教育課程・教育内容】【教育方法】【学習成果】それぞれの項目の中で「特色」または「課題」を選択し、内容について記入してください。

## 【教育課程・教育内容】

- ・教育目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの適切性と関連性の検証
- ・学生の能力育成のための、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容の適切な提供
- ・教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等含む）への配慮が行われている。また教養教育と専門科目の適切な配置が行われている。）
- ・幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程の編成
- ・初年次教育・高大接続への配慮
- ・学生の国際性を涵養するための教育内容の提供
- ・学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育の適切な実施

## 特色

## 初年次教育・高大接続への配慮

生命科学部では高大接続への配慮として、推薦入試制度を利用した入学予定者に対する入学前教育として、e-ラーニングの履修を課している。また、付属校出身の入学予定者に対する事前課題として、生命機能学科では化学に対する基礎知識およびゲノム・タンパク質・細胞についての問題を日本語と英語で解答する課題、環境応用化学科では木下是雄著「理科系の作文技術」（中公新書）を読んで指定箇所の内容の要約および演習問題の設定、応用植物科学科では「植物たちの戦争」（講談社ブルーバックス）を読み、植物病に関する内容をまとめる課題を与えている。入学時のプレースメントテストおよびTOEIC-IPテストの成績を、生命機能学科では「生命機能学基礎英語Ⅰ・Ⅱ」、環境応用化学科では「化学基礎Ⅰ・Ⅱ」、応用植物科学科では「入門生物学」のクラス分けに活用している。しかしながら、専門教育の受講に必要な学力が十分とは言えない新入生が少なからず存在していることから、2021年度に生命科学部基礎教育カリキュラム委員会を発足し、教養教育と専門教育の連携、特に基礎教育のカリキュラム改革について議論を重ねてきた。そして今年度、リメディアル科目として入門数学、入門物理学、入門化学、入門生物学の新規開講に至った。

各学科における初年次教育の特色は以下のとおりである。生命機能学科では理系教養科目（化学、物理学、数学）の積極的な履修を教務担当教員が中心となって指導している。また、専門科目についてもカリキュラム・ポリシーに基づいた3つの履修コースの履修モデルを提示している。1年次のガイダンス時に必修実験演習科目のテキストとして「生命機能学実験の手引き」を配布している。このテキストには実験の技術的な内容だけではなく、生命科学と英語の学習法、作文技術などについても掲載し、その内容についてのオンデマンド授業も行っている。さらに、必修科目として「分子生物学Ⅰ・Ⅱ」「生物化学Ⅰ・Ⅱ」「細胞生物学Ⅰ・Ⅱ」「生物物理学Ⅰ・Ⅱ」を設置し、高大接続に配慮した上で大学レベルの生命科学の基礎を習得させるとともに、さらに進んだ専門科目への導入を図っている。環境応用化学科では、「応用化学基礎」において履修登録予定表を担当教員が確認し、履修に関するきめ細やかな指導をしている。特に、理系教養科目（化学、物理学、数学）の履修を強く推奨している。応用植物科学科では、各学年に対して2名ずつの教員を「学年担当」として配置するとともに、ラーニングサポーター制度を活用することによってよりきめ細かい履修指導を継続している。また、初年次にレポートの作り方や資料の収集方法など、基本的な学習法を教育している。

## 【教育方法】

- ・教育上の目的を達成するための、効果的な授業形態の導入（PBL、アクティブラーニング、オンデマンド

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

授業等) ・授業がシラバスに沿って行われているかの検証（後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）	
特色	授業がシラバスに沿って行われているかの検証（後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）
<p>生命科学部では、2010年より相互授業参観を毎学期実施してきている。公開科目は一部の実験・実習科目を除く専任教員・兼任講師が担当する90科目以上に達しており、授業内容の検証を兼ねると同時に、授業参観者アンケートの自由コメント欄では、それぞれの授業で行っている工夫が参考になったという意見が多く、教育の質向上に役立っている。各学科で兼任講師懇談会を年1回開催し、兼任講師の担当講義科目についても教育成果について検証し、教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。</p> <p>各学科における対応は以下の通りである。生命機能学科では、授業改善アンケートのシラバス関係の項目の結果について教室会議で検証している。さらに、2014年度より専任教員担当科目のシラバス原稿をウェブ上で閲覧する体制を構築し、相互チェックを実施している。2015年度より専任教員と兼任講師がそれぞれ担当する科目の内容の適切性を検討するために懇談会を実施している。環境応用化学科では、2014年度より教室会議で学科の全科目についてシラバスの記載内容をチェックし、常に検証する体制を取っている。また、兼任講師が担当する科目については、採用時にシラバスの提出を求め、教室会議にて記載内容を検証している。さらに、専任教員の担当する授業科目に関して、学期毎にシラバス通り授業がおこなわれたかの指標としてシラバス合致度をチェックし、シラバス合致率80%未満の科目については担当教員にその理由の説明を求めている。</p> <p>応用植物科学科では、授業の初回に学生にシラバスを提示して授業を進めるとともに、授業改善アンケートにおいてシラバスの内容が反映されているかどうかの項目に対する回答を検証することで改善を図っている。2014年度より教室会議で全科目についてシラバスの記載内容をチェックする体制を取っており、2021年度以降は全教員が参加してシラバスチェックを実施している。</p>	
<b>【学習成果】</b> ・成績評価及び単位認定を行うための制度や学位授与の実施手続き及び体制についての適切な運用。 ・アセスメント・ポリシーに基づいた学習成果を把握する取り組み ・アセスメント・ポリシーに基づき学習成果を定期的に検証し、その結果をもとにした教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組み	
特色	アセスメント・ポリシーに基づき学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組み
<p>生命科学部では各学科が各々の学問分野の特性に最適化された学習成果の検証、教育内容の改善・向上に向けた取り組みを行っている。</p> <p>生命機能学科では、1～2年次の実験・演習・科学英語において統一テストを行い、定量性をもつ達成度を測定すると同時に、各学生の達成度を可視化している。さらに、統一小テストおよび期末テストの結果を入学時のプレースメントテストおよびTOEICの成績と比較・分析し、教育効果について議論・検証している。3年次の実験・演習・科学英語科目について学生にアンケートを行い、教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。2～4年次に各研究室で取り組む研究室配属授業（実験・演習・科学英語）では、その集大成となる「卒業論文」について、全専任教員が全ての口頭発表を審査・採点し、判定会議において採点結果をもとに評価を決定している。また、学生による学会発表を推奨し、学会発表数を教育成果の一つとして可視化している。</p> <p>環境応用化学科では、学期末定期試験によって授業科目の到達度を評価している。学期末定期試験が実施されない科目に関しては、授業内課題に対する評価により学習成果を測定している。さらに集中講義科目においては、授業時間内テストもしくはレポート、授業終了後の一定期間に提出されたレポート課題により達成度を評価している。さらに、教室会議において全教員が授業報告を行い、各科目の成績分布を報告、授業方向の改善に向けた議論を定期的に実施している。特に、実験科目のレポート、演習・実習科目の</p>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。



成績分布を詳細なデータにまとめて教室会議で議論している。4年間の学習成果として、卒業論文の提出および卒業研究発表を必須とし、全教員が審査することで学習成果を測定するとともに、可視化している。また、公的資格を取得した学生を表彰する生命科学部奨励賞を制定し、学生の課外活動による自己研鑽を奨励している。

応用植物科学科では、GPA や TOEIC の年次比較のほか、実験・実習科目におけるレポート内容の確認・比較を行っている。卒業研究発表会において、全教員による発表内容・態度の採点をおこない、相互に採点内容を確認することで、学習成果評価を適切に行っている。技術士一次試験合格者、樹木医補・自然再生士補の資格取得状況、学生による学会発表件数の統計データを収集し、年次変動を確認している。年度末には、教室会議において学生の単位取得状況に関するデータを基に学生指導に関する検討を行い、その方針に則った指導に全教員が取り組んでいる。さらに、授業改善アンケート以外に学科独自のアンケート調査を実施し、教員会議で結果を分析している。特に、毎月2回程度開催される教員会議において試験の成績や資格取得者数など教育成果に関する情報を共有化し検証しているほか、学業不振学生について原因の分析、保護者面談の実施を含めた対策を定期的に議論している。

その他、上記項目以外で学部として「特色」として挙げられるもの、または「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものがありましたら記入してください。

### 特色

#### ・教育課程の編成

生命科学部では、基盤となる講義・実習を1～2年次の必修科目、専門的な講義を3～4年次の選択科目としている。特に1年次には、教養科目から専門教育への接続科目として、「物理学基礎」「化学基礎」「生物学基礎」「微分積分学」「線形代数学」「科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」などの理系教養科目を配置している。「科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は選択科目であるが、専門科目への導入の役目を果たす重要な教養科目と位置付け、環境応用化学科ではすべての学生に科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲすべての科目の受講を強く奨励している。さらに、生命機能学科では2年次から研究室配属を希望する学生に「科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の履修を必要要件としている。また、応用植物科学科では全学生に対し、植物病の診断・治療・予防の先端技術習得に必要な基礎生命科学に関連する科目の履修を推奨している。このように、学生が問題意識をもち自ら学ぶ自立性を涵養するため、1年次から実験・演習科目を教育課程に積極的に導入している点が理系学部としての特色である。

各学科では、「カリキュラム・ポリシー」に基づく3つの履修コースを設定し、順次性および体系的に配慮した教育課程を編成している。

生命機能学科：ゲノム機能コース、蛋白質機能コース、細胞機能コース

環境応用化学科：物質創製化学コース、グリーンケミストリコース、環境化学工学コース

応用植物科学科：植物クリニカルコース、グリーンテクノロジーコース、グリーンマネジメントコース

詳細は以下の通りである。生命機能学科では、生命科学を学び、研究する上での基礎学力をつけるため、理系教養科目の履修をガイダンスや授業の中で指導している。1,2年次の必修科目「生命機能学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」と「生命機能学基礎英語Ⅰ・Ⅱ」で、実験の原理の理解や手技、科学英語の読解などの能力の涵養を図っている。1年次の必修科目「生物化学」「分子生物学」「細胞生物学」「生物物理学」を担当する専任教員が講義内容を綿密に協議・検討して分担し、体系的なカリキュラムを設定している。研究に対して高い意欲をもつ学生を対象に、2年次からゲノム、蛋白質、細胞のいずれかの分野の研究室に所属し、講義と並行して研究を行うことを可能にしている。希望者に対しては4年次まで同じ研究室で研究を継続することができる。このように、2年次から研究室に所属できるカリキュラム上の特色を生かし、研究を通して総合的な判断力の育成を目指している。同時に、研究室におけるコミュニケーションを通して社会性を身に着ける機会を与えている。環境応用化学科では、1年次必修科目「応用化学基礎」において、学科

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

の専門科目を踏まえた教養科目の履修指導を行うとともに、教員との対話、学生間のディスカッションの場を提供し、総合的な判断力や豊かな人間性を養うことに努めている。さらにラーニングサポーター制度により上級生と交流する機会を設けることで、学習意欲の向上のみならず人間形成にも役立てている。実験科目「基礎応用化学実験」「応用化学実験 IAB・IIAB」および「卒業研究」を通じて、自ら学ぶ能力の育成に力を入れている。また、学びの意欲を高め幅広い教養を深めるため、公的資格試験合格者等を対象に生命科学部奨励賞を授与している。応用植物科学科では、樹木医補、自然再生士補、技術士補などの各種資格の取得に向けた科目を開講するとともに、公務員受験対策コースの設定やインターンシップを必修科目とするなど、社会が求める人材の育成に努めている。1～3年次の実験・実習科目（必修）において学生参加、問題解決、対話型の授業を実施している。特にインターンシップ（2年次必修）を対話型、学生参加型のアクティブラーニング授業と位置づけ、総合的な判断力や豊かな人間性の涵養に努めている。

## 課題

### ・大学院進学率

生命科学部では、学部の理念に掲げる「統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成」を実現するために、キャリアパスの第1候補として大学院進学を重視している。学生に対する理系キャリア教育を実施するために、執行部、各学科就職担当教員がキャリアセンターと連携し、キャリアセンター主催の大学院進学ガイダンスへ参加を学生に呼びかけている。生命機能学科では、3年生を対象に「進学説明会」と「就活説明会」を開催している。進路選択の判断材料を与えるため、研究者・技術者として活躍している大学院修了生に自身の体験を話してもらっている。環境応用化学科では、1年次の必修科目「応用化学基礎」において、専門家によるキャリア教育を2回のうち1回を本学大学院修了生に依頼し、進学意欲の育成を試みている。応用植物科学科では、キャリア教育の一環として、技術士試験対策、樹木医補、自然再生士補の資格取得に向けた科目を初年次から受講するように指導している。また、2年次の秋学期にはキャリアアップ・ガイダンスを行い、専門家による講演や先輩の就活体験談を通じて進路選択の動機付けを行っている。しかしながら、大学院進学率は年度や学科により25～45%に留まっており、進学率の向上が課題となっている。

## 2 学生の受け入れ

### (1) 点検・評価項目における現状

#### 2.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

##### 2.1①学位ごとに学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を記入してください。

生命科学部では以下を学生の受け入れ方針とし、さらに学科ごとに詳細を定める。

1. 入学後の修学に必要な数学や理科（物理、化学、生物、地学）の基礎知識や基礎実験技術を備えている。
2. 入学後の修学に必要な言語能力（特に日本語・英語）と、社会や文化についての知識を有する。
3. 学問を貪欲に吸収し、科学技術の進歩を社会に生かそうとする積極性と意欲を有する。
4. 物事を論理的に幅広く考察することができる。

各学科で授与する学位およびアドミッション・ポリシーは以下の通りである。

<生命機能学科：学士（生命科学）>

21世紀の生命科学は、従来の枠組みを超える学際的な学問へと展開している。したがって、専門的知識を幅広くかつ正しく理解し、応用できることはもちろん、日本語および外国語を用いたコミュニケーション能力をもち、人文学や社会科学の素養を踏まえた幅広い視野をもつ人材が望まれる。本学科では、以下のような入試制度を設置して、さまざまな経路から熱意のある有為な学生を広く募集し、学生の多様性を高め、学生どう

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

しの相互啓発を促し、教育効果の促進を図る。

- ・ 一般選抜（A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）および大学入学共通テスト利用入試）：一般選抜では、高等学校卒業程度の学力水準を前提に、先端的生命科学の修学・研究に必要となる基礎学力を評価する。
- ・ 学校推薦型選抜（指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試等）：出願書類及び面接等によって、基礎学力と学習意欲、生命科学に対する関心と自発性、創造性を評価する。
- ・ 外国人留学生入試、帰国生入試等：出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と生命科学に関する基礎学力を有すること、生命科学に対する関心と自発性、創造性を評価する。

<環境応用化学科：学士（理学）>

創造性を高め、相互に琢磨する教育環境を構築し、多様な素質を持った学生を受け入れるために、下記のような入試制度を設けている。入学後の学生の追跡調査により、これら入試制度のより適切な運用、改善に努めている。

- ・ 一般選抜（A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）および大学入学共通テスト利用入試）：一般選抜では、高等学校卒業程度の学力水準を前提に、応用化学の修学・研究に必要となる基礎学力を評価する。
- ・ 学校推薦型選抜（指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試等）：出願書類及び面接等によって、基礎的な学力と学習意欲、化学への関心と、化学及び自然科学における問題解決への意欲を評価する。
- ・ 外国人留学生入試、帰国生入試等：出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と化学に関する基礎学力を有すること、化学及び自然科学における問題解決への意欲と本学科への志望意思を確認する。

<応用植物科学科：学士（生命科学）>

植物は人類が地球上で生存していく上で必要不可欠な生物であるとの認識のもと、食料、資源、環境問題に関心を持つ意欲あふれる次のような学生を受け入れることを基本としている。

1. 最新の生命科学の知識を貪欲に吸収し、科学技術の発展を通じて社会に貢献しようとする学生
  2. 現代社会のかかえる広範で深刻な問題を、柔軟な思考と実践的な能力を基礎にして解決しようとする研究・技術者を目指す多様な学生
  3. 国際的な視野で食料、環境問題や、貧困や飢餓問題に勇敢に挑戦し、解決に向けて国際舞台で活躍しようとする意欲ある学生
- ・ 一般選抜（A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）および大学入学共通テスト利用入試）：一般選抜では、高等学校卒業程度の学力水準を前提に、植物医科学の修学・研究に必要となる基礎学力を評価する。
  - ・ 学校推薦型選抜（指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試等）：出願書類及び面接等によって、基礎的な学力と学習意欲、植物医科学への関心と、食料・資源・環境分野における問題解決への意欲を評価する。
  - ・ 外国人留学生入試、帰国生入試等：出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力や生命科学に関する基礎学力、食料・資源・環境分野における問題解決への意欲、および本学科への志望意思を有することを確認する。

2.1②上記のアドミッション・ポリシーには、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを踏まえた、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や、入学希望者に求める水準等の判定方法が明確に示されていますか。	はい
2.1③上記のアドミッション・ポリシーを公表していますか。	はい

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p><b>【根拠資料】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生命科学部ホームページ <a href="https://www.hosei.ac.jp/seimei/shokai/policy/admission/">https://www.hosei.ac.jp/seimei/shokai/policy/admission/</a></li> <li>生命機能学科ホームページ <a href="https://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/admisp/">https://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/admisp/</a></li> <li>環境応用化学科ホームページ <a href="https://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/subject/">https://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/subject/</a></li> <li>応用植物科学科ホームページ <a href="http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/admisp/">http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/admisp/</a></li> </ul>
--

2.2 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

2.2①アドミッション・ポリシーに基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制をどのように適切に整備していますか。また、入学者選抜をどのように公正に実施していますか。

一般選抜（A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試、大学入学共通テスト利用入試）では、筆記試験により高等学校卒業程度の学力水準を前提に生命科学部における修学・研究に必要となる学力を評価している。学校推薦型選抜（指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試）、外国人留学生入試、帰国生入試では、複数の審査員による書類審査および面接試験によって、生命科学部における修学・研究に必要となる基礎的な学力、自然科学への学習意欲、生命科学部の各学科への志望意思を評価している。これらの入試制度によって多様な学生募集の経路を確保するとともに、生命科学部の受け入れ方針に沿った入学者を公正に選抜する体制を整備している。

2.3 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

2.3①【2023年5月1日時点】学部・学科における入学定員充足率の5年平均又は収容定員充足率は、下記の表1の数値を満たしていますか。	はい
---	----

2.4 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

2.4①上記項目において【いいえ】と回答した場合は、その理由と改善に向けた今後の取り組みについて記入してください。

表 1

学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均	0.90～1.20 未満
学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率	0.90～1.20 未満

3 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

3.1①学部の求める教員像および教員組織の編成方針を記入してください。

生命科学部では、「生命」と「環境」と「物質」三領域の有機的連関に基づく最新生命科学の知見を活用した「持続可能な地球社会の構築」に貢献できる柔軟で統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成、多様化社会で活躍できるためのコミュニケーション能力や自己キャリアデザイン能力をもつ人材育成拠点の樹立を理念・目的としており、本学部のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーに沿った教育研究活動を学生に展開していく教員を求める。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。



学部の求める教員像に基づく各学科の教員組織の編成方針は以下の通りである。生命機能学科では「生体を構成するタンパク質・ゲノム・細胞から生命をそれらの有機体として捉え、かつ、これらの学問領域での先進的教育と研究を実践できる教員」を求める。環境応用化学科では「グリーンケミストリを基礎理念とし、有機化学、無機化学、物理化学、環境化学、環境化学工学の各分野をバランスよく習得し、これらの境界領域までカバーする 21 世紀型先端化学の教育研究に取り組む教員」を求める。応用植物科学科では「植物医科学分野で最先端の知識・技量と豊富な経験を有し、資格取得のサポートもできるような実践的教育・研究を遂行できる教員」を求める。

3.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

3.2①学部の教員組織の編制は、理念・目的、教員組織の編制方針に整合していますか。	はい
3.2②教員組織の規模について、教育研究上必要となる数の専任教員がいますか。	はい
3.2③専任教員の専門性や、主要科目への配置など、教育を実施するうえでどのような体制をとっていますか。	<p>生命科学部では「生命」と「環境」と「物質」三領域の有機的連関に基づく最新生命科学の知見を活用した「持続可能な地球社会の構築」に貢献できる柔軟で統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成を目的とし、以下の通り各学科の教員組織を編成している。生命機能学科では「生体を構成するタンパク質・ゲノム・細胞から生命をそれらの有機体として捉え、かつ、これらの学問領域での先進的教育と研究を実践できる教員」として、タンパク質分野 2 名、ゲノム分野 3 名、細胞分野 4 名の専任教員を卒業研究などの主要科目へ配置している。環境応用化学科では「グリーンケミストリを基礎理念とし、有機化学、無機化学、物理化学、環境化学、環境化学工学の各分野をバランスよく習得し、これらの境界領域までカバーする 21 世紀型先端化学の教育研究に取り組む教員」として、有機化学分野 2 名、無機化学分野 2 名、物理化学分野 2 名、環境化学分野 1 名、環境化学工学分野 2 名の専任教員を卒業研究などの主要科目へ配置している。今後、講義科目と実験科目の連携を密にして教育体制をより一層充実させるために、教務助手の定員枠の拡充が望まれる。応用植物科学科では「植物医科学分野で最先端の知識・技量と豊富な経験を有し、資格取得のサポートもできるような実践的教育・研究を遂行できる教員」として、植物医科学を支える菌類学、細菌学、ウイルス学、害虫学、生理学、社会科学の各分野を専門とする専任教員を卒業研究などの主要科目に配置している。さらに、生命科学部では「多様化社会で活躍できるためのコミュニケーション能力や自己キャリアデザイン能力をもつ人材育成」の観点から、数学分野 1 名、物理分野 1 名、化学分野 1 名、生物分野 1 名、英語分野 1 名、グローバル化担当 1 名、体育分野 1 名を配置しており、生命科学部にふさわしい教養教育と専門教育が相互に関連した教育体制を構築している。</p> <p>教員の職位構成は教授 26 名、准教授 4 名、専任講師 4 名、助教 2 名の合計 36 名となっており、著しい偏りはない。また、教員の年齢構成は、候補者の年齢を配慮した人事を行ってきたため、比較的バランスが取れている。引き続き、教員の職位構成や年齢構成に著しい偏りが起こらないよう人事を行う予定である。</p>

3.3 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

3.3①教員の募集、採用、昇任等の手続きや運用に関する規程は整備されていますか。	はい
3.3②上記の規定は、公正性、適切性が担保されるよう適切に運用されていますか。	はい
【根拠資料】	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。



- ・ 生命科学部教員審査内規
- ・ 生命科学部教授，准教授および専任講師資格に関する内規
- ・ 生命科学部教授，准教授および専任講師資格に関するガイドライン

3.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

3.4①学部（学科）内のFD活動は組織的に行われていますか。	はい
3.4②上記項目について【はい】と回答した場合は、2022年度のFD活動の実績（開催日・テーマ・参加人数）を記入してください。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6/6～7/2 および 11/7～12/3・授業公開・延べ人数 83 名 教員（専任教員・兼任講師）が相互参観を行うとともに、技術系職員（教務助手・教育技術嘱託）が参観した。</li> <li>・ 4/22, 5/27, 6/24, 7/29, 9/30, 10/28, 11/18, 12/16・教育開発・学習支援センター長講演・延べ人数 248 名 センター長から FD 推進活動について詳細な説明を受け、教員の資質向上や教育方法の改善について討論した。</li> <li>・ 7/5, 7/19, 9/27, 11/1, 11/22・環境応用化学科授業報告・延べ人数 55 名 環境応用化学科の専任教員が授業内容を報告し、教育方法の改善について討論した。</li> <li>・ 3/11・環境応用化学科化学系教員懇談会・22 名 環境応用化学科の専任教員および兼任講師が互いの教育方法の改善について討論した。</li> <li>・ 3/3・生命機能学科兼任講師懇談会・専任教員 11 名、兼任講師 11 名 生命機能学科の専任教員からカリキュラム等を紹介し、兼任講師と学生問題についての討論や意見交換を行った。</li> <li>・ 9/16, 10/7・応用植物科学科教員会議・専任教員 11 名 応用植物科学科では専任教員が学科専門科目のカリキュラム編成の学生の履修状況に合わせた改変について検討した。</li> </ul>	
3.4③学部（学科）内において研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	はい
3.4④上記項目で【はい】と回答した場合は、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための取り組みの実績（開催日・テーマ・参加人数等）について記入してください。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 11/3・法政科学技術フォーラム 生命科学部の教員 3 名がフォーラムでポスターセッションに参加し、研究成果を発表した。</li> <li>・ 12/23・小金井研究交流セミナー・44 名 生命科学部の教員がセミナーで研究内容を紹介した。</li> <li>・ 5/27・2022 年度第 1 回生命機能セミナー・44 名以上 研究講演会を実施して最先端の研究を共有し、研究活動の活性化を図った。</li> <li>・ 7/6・2022 年度第 2 回生命機能セミナー・73 名（第 1 回グリーン・サステナビリティセミナーと共催）</li> </ul>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- ・ 10/18・2022年度第3回生命機能セミナー・26名  
研究講演会を実施して最先端の研究を共有し、研究活動の活性化を図った。
- ・ 11/10・2022年度第4回生命機能セミナー・70名（第2回グリーン・サステナビリティセミナーと共催）
- ・ 12/15・2022年度第5回生命機能セミナー・103名（第3回グリーン・サステナビリティセミナーと共催）
- ・ 7/6, 11/10, 11/22, 12/15・環境応用化学セミナー・延べ人数230名  
化学の先端的な研究や産業的に重要な事柄に関する講演会を開催した。
- ・ 12/7～12/9・エコプロ2022・6名  
環境応用化学科の教員が研究活動を展示し、広く一般に公開した。
- ・ 8/2～4・植物防疫技術研修会（病害編）・9名  
応用植物科学科植物医科学センターが一般社団法人日本植物防疫協会と共催で、植物の主要病害の見分け方等を研修する研修会を開催した。
- ・ 8/23～25・植物防疫技術研修会（害虫編）・14名  
応用植物科学科植物医科学センターが一般社団法人日本植物防疫協会と共催で、野菜を加害する微小昆虫の見分け方等を研修する研修会を開催した。
- ・ 8/30, 31・IPMアドバイザー講習会・24名  
応用植物科学科植物医科学センターが一般社団法人全国農業改良普及支援協会と共催で、IPM（総合的病害虫管理）に取り組む「IPMアドバイザー」としての資格認定をするための講習会および認定試験を実施した。

#### 4 学生支援

##### (1) 特色・課題

<p>以下の項目の中で、学部として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを選択し、記入をしてください。</p>	
<p><b>【学生支援】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生の能力に応じた補習教育、補充教育</li> <li>・ 学生の自主的な学習を促進するための支援</li> <li>・ 学習の継続に困難を抱える学生（留年者、退学希望者等）への対応</li> <li>・ 成績不振の学生の状況把握と指導</li> <li>・ 外国人留学生の修学支援</li> <li>・ オンライン教育を行う場合における学生への配慮（相談対応、授業計画の視聴機会の確保等）</li> </ul>	
特色	学生の能力に応じた補習教育、補充教育
<p>生命科学部では、教員のオフィスアワー、上級生によるラーニングサポーター、大学院生によるティーチングアシスタント制度など、教職員および学生の複数のチャンネルからサポートする学生支援体制がとられている。生命科学部全教員がオフィスアワーを設定し、希望する学生が自由に教員と相談できる体制が整っている。これに加え、学生がより気軽に相談できるよう、上級生が下級生を教えるラーニングサポーター制度を導入している。さらに実験実習科目を中心に、大学院生が学部生をきめ細やかにサポートするティーチングアシスタント制度を実施している。生命機能学科では、1～3年次のクラス担任と実験・演習科目の担当教員を担当者とし、学生の補習教育に当たっている。環</p>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>環境応用化学科では、1年次に少人数のクラス担任制度を導入している。3～4年次での主として卒業研究の指導教員が学生の能力に応じた補充教育に当たっている。また、教務助手が主要講義科目、実験・演習科目の教育内容を把握しており、教員をサポートし、学生からの質問にきめ細かく対応できる補習教育体制を整えている。応用植物科学科では、1～3年次のクラス担任と実験・実習科目の担当教員が高頻度かつ緊密に学生の補充教育にあたっている。特に、1年生に対する植物生産実習において、作物の病害虫発生調査・管理等を1時限前に教員、教務助手が連携し指導している。</p>
<p>その他、上記項目以外で学部として「特色」として挙げられるもの、または「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものがありましたら記入してください。</p>
<p><b>特色</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・成績不振学生への対応</li> </ul> <p>生命科学部では、2014年度より「累積GPAが1.0以下または学習態度や達成度に重大な問題があると認められる者」を成績不振学生と定義し、各学科において以下の通り対応している。生命機能学科では、学生担当教員が学科主任と連携し、成績不振学生の対応を主導している。当該学生に対して、メールもしくは文書による本人への注意喚起、個人面談、郵送による保証人への通知を含めた個別指導を行っている。学生担当教員と基礎実験演習担当教員を中心に、成績が不振な学生の状況を教室会議で共有するとともに、必要に応じて個別に面接を行い、きめ細かい指導をしている。さらに、成績不振など問題を抱える学生の状況は出来る限り学務課とも共有している。また、学生担当教員が個々の学生の成績などを調査し、規定単位の取得が危ぶまれる学生や成績が低下しつつある学生などについて、面談や必要に応じた保護者への連絡などを行い、学生が留級に至らないようサポートを行っている。環境応用化学科では、成績不振学生の情報を教員間で共有し、必要に応じて各教員が面談し、適切な指導をおこなっている。特に必修の実験科目の出席状況やレポート課題提出状況を学生の学習意欲と理解度をリアルタイムに反映する重要な指標と考え、学期途中に適宜モニターして対応している。また、年度始めに学科主任が留級生と面談し、サポートをおこなっている。応用植物科学科では、教室会議で「GPA1.0以下の学生、実験実習（全14回）で4回以上欠席した学生、実験実習でのレポート未提出者、1～3年生の進級要件を満たしそうにない単位少修得者、4年生の卒業要件不足見込み者」などを成績不振学生としてリストアップし、全教員で情報を共有した上で優先的にケアしている。学生問題担当教員が各学年担当教員2名、さらに必要に応じて学務課・学生生活とも連絡をとりつつ、成績不振者を指導している。また、教員会議において、成績不振学生、休みがちな学生の情報を共有し、成績調査、個人面談などの就学支援サポートを行っている。</p>
<p><b>課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人留学生の修学支援</li> </ul> <p>生命科学部では、国際ボランティア意識の高い学生を留学生対象ラーニングサポーターに任命し、対応にあたっている。生命機能学科では、日本語能力を含めた様々な背景をもつ留学生に学科主任が中心となって個別に修学支援をおこなっている。その情報は学科会議で共有され、必要に応じて留学生の保護者に母国語に翻訳した手紙で修学状況を報告することもある。環境応用化学科では、留学生について教室会議で情報共有を行い、各科目でのサポートに活かしている。応用植物科学科では、学科を挙げて修学支援に力を入れている。この数年間、新型コロナウイルスの影響もあり、日本人学生と比べて外国人留学生の修学支援がやや停滞していたことは否めず、状況を正確に把握することも含めて、留学生に向けた修学支援の呼びかけや教員とコミュニケーションをとるための施策を検討したい。</p>

## 5 教育研究等環境

### (1) 点検・評価項目における現状

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

## 5.1 研究倫理を遵守するための必要な措置を講じ、適切に対応しているか。

5.1①学部として研究倫理の向上及び不正行為の防止等について、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じていますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生命機能学科 教室会議議事録</li> <li>・ 生命機能学科 学科別ガイダンス資料</li> <li>・ 環境応用化学科 教室会議議事録</li> <li>・ 環境応用化学科 学科別ガイダンス資料</li> <li>・ 応用植物科学科 教員会議議事録</li> <li>・ 応用植物科学科 学科別ガイダンス資料</li> </ul>	

## III 2022 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	理念・目的	
中期目標	生命科学部では、自然科学の知識を基盤として多様な生命科学を学ぶことができることを、在学生および受験生と保護者などに対して周知する。	
年度目標	前年度に引き続き、学部、および各学科のホームページのリニューアルや更新を行うことで広報活動に務める。また、学生モニターを実施し、学部パンフレットに掲載されている理念・目的などの内容が周知されているかを検証する。	
達成指標	掲載ページの訪問回数、および学生モニターにおける回答内容。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	学部や各学科の HP を随時更新し、イベントに関するお知らせや研究活動の紹介を行った。2022 年度の学部ホームページの閲覧数は 89,234 回(2/21 時点)であり、昨年度より減少したものの、過去 2 番目の高い閲覧数であった(2019 年度 37,507、2020 年度 61,546、2021 年度 104,384)。また、広報活動に関するアンケート調査を実施するとともに、学生モニターについては対面での対談を実施した。学部の理念・目的に関する回答結果を教授会で情報共有した。
	改善策	広報活動に関するアンケート結果からも HP の重要度が高いことが示唆されており、引き続き HP の改善に務め、学部の理念や取り組みを紹介していくことが重要である。また、広報活動に関するアンケートや学生モニターを継続することによって、在学生や受験生の理解度・志望理由などに関するデータの蓄積を行う。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	コロナ禍による対面での広報活動が十分できない中、本学の理念・目的の周知のために HP を通して広く情報発信することは極めて重要である。2019 年度以降、HP のアクセス数が上昇傾向にある。さらに、アンケート調査を継続的に実施していることは評価できる。
改善のための提言	新生を対象に実施したアンケート結果や学生モニターの結果や感想を次年度以降の学部運営に活かすための検討をしていただきたい。	
評価基準	内部質保証	
中期目標	自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割をより明確に分けた現在の体制を維持し、厳格な PDCA サイクルを行う。	
年度目標	前年度の年度末状況報告書を反映して改善(A)した年度計画(P)を立て、自己点検評価シートを作成する。年度中は、質保証委員会において、執行部の年度計画の実行(D)状況を確認する。年度末には、質保証委員会の評価(C)を反映させた年度末状況報告書を精査して執行部にフィードバックし	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	次年度に引き継ぐ。これにより、厳格な PDCA サイクルを行う。	
達成指標	執行部会議および質保証委員会議事録、開催回数、および議論の内容の記録。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	自己点検評価シート、年度末状況報告書を精査して執行部にフィードバックし、厳格な PDCA サイクルを行っている。なお、執行部会議を 16 回開催、質保証委員会を 4 回開催し、議論の内容は議事録として記録を残している。
	改善策	特になし。引き続き厳格な自己点検を継続する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	執行部会議に加え、質保証委員会による年度末状況報告書等の点検・評価が厳格に実施されている。PDCA サイクルが適切に行われていると評価できる。
	改善のための提言	—
評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
中期目標	教養科目と専門科目の連携を強化すると同時に、カリキュラムを見直し、リメディアル教育など新しい科目を導入することで、理系基盤教育を充実させる。	
年度目標	生命科学部に所属する教養担当教員と専門科目担当教員が意見交換をする場として、教養・専門教育連携委員会を開催する。今年度は、昨年度までに行った議論に基づき、一部理系教養科目を改編し、リメディアル科目、新たな理系教養科目の新設を目指す。	
達成指標	教養・専門教育連携委員会の開催記録。履修の手引など。生命科学部基礎教育カリキュラム委員会の開催回数。教授会議事録。学則。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	生命科学部に所属する教養担当教員と専門科目担当教員が意見交換をする場として、教養・専門教育連携委員会を開催した。学生モニターで得られた問題点や課題について議論し、教養科目における生命科学部生向けの動機づけなど、教養・専門の間の連続性をより強化するための方策が検討された。また、基礎教育カリキュラム委員会を中心として、リメディアル科目の設置や、専門と基礎をつなぐ学部共通科目の新規導入を行うためのカリキュラム変更を行った。
	改善策	特になし。来年度も教養・専門教育連携委員会、および基礎教育カリキュラム委員会を開催し、教養・専門の間の連続性をより強化するための方策を継続して検討する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	教養・専門教育連携委員会が継続的に開催され、生命科学部における教養・専門の間の連続性をより強化するための方策が検討された点が評価できる。さらに、基礎教育カリキュラム委員会を中心として、リメディアル科目の設置や、専門と基礎をつなぐ学部共通科目の新規導入を行うためのカリキュラム変更を行ったことも評価できる。
	改善のための提言	今後も教養担当教員と専門科目担当教員の意見交換の場を継続・強化していくことが望まれる。
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
中期目標	対面とオンライン両方の利点を組み合わせた新しい教育・学習形態を確立	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。



	する。	
年度目標	新型コロナウイルス感染症に対応するため、ハイフレックス授業や対面での実験実習など、感染症対策に配慮しながら学習成果の向上を目指して新たな教育方法を模索していく。感染症の状況に応じて授業形態を随時変更するなど、柔軟に対応していく。	
達成指標	対面やハイフレックス授業の実施状況を把握した上で、授業公開を実施し、その後のアンケートによりその効果を検証する。シラバスの活用。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	多くの講義が対面またはハイフレックス形式で授業が行われた。また、授業支援アシスタント制度やラーニングサポーターを活用することにより、学習効果の向上が図られた。実験科目では、感染症対策に配慮しながら対面での実習が実施された。また、教授会の時間帯を利用してFD活動を複数回実施し、授業方法を改善するための組織的な取り組みを行った。授業公開は春学期・秋学期とも全教員を対象として行った。Google フォームとスプレッドシートを用いることによって授業相互参観の申請を管理し、同時に授業の実施形態を調査した。
	改善策	来年度もオンデマンドやオンライン授業の実施状況を把握し、学習効果をモニターする。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	今年度はコロナ禍に慎重に対処しながら、多くの授業でハイフレックス形式とともに対面形式の授業が行われた。特に、実験科目ではほぼ全面的に対面形式で行われたことが評価される。また、アシスタント制度やラーニングサポーター制度を巧みに活用しながら学習効果を高めたことは評価に値する。その他、FD活動や授業公開などにより、授業の質の向上に努めたことは高く評価される。
改善のための提言	授業公開において、昨年度導入した Google フォームとスプレッドシートを用いた参加手続は本事業の運営を円滑にしていることから、次年度以降も継続すべきである。	
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
中期目標	学習の総合的な結果である研究成果を対外的に発表することを促進する。	
年度目標	生命科学部では、学部生の学会発表が多くなされており、研究成果の対外的発表が活発に行われている。今年度以降も、この状況を持続させることに注力し、学外発表費用の補助も拡充していく。	
達成指標	学部生の学外発表の回数。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	学会における学生の発表は、そのほとんどが大学院生によるが、学部生の学外発表数も3学科合わせて33件であり（昨年度は29回）、新型コロナの影響によって依然としてオンライン開催となる学会が多い中、対外的発表が積極的に行われた。
	改善策	今後は対面開催の学会が増加することが予想されるが、引き続き研究成果を対外的に発表することを促進する。
	質保証委員会による点検・評価	
所見	研究活動の成果を研究集会や学会等で対外的に発表することを促していることは、理系学部学生の教育として重要である。コロナ禍のため、多くがオンライン開催ではあるが、その数を継続的にモニターしている点は評価できる。	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	改善のための提言	経常費から支出する学部学生を対象とした学外発表費用は、交通費の上限を除外する検討をすべきである。
	評価基準	学生の受け入れ
	中期目標	広報イベントを通じた受入方針の周知について、効率のよい方法を確立する。
	年度目標	例年、新入生に対して広報イベントに関するアンケートを行い、入学者がよく参加したイベントや、進路の最終決定におけるホームページの重要性などについて調査してきた。2022年度も1年生に対してオンラインでアンケートを実施するとともに、多くの広報イベントが中止になった影響などについても分析する。
	達成指標	広報活動に関するアンケートの実施とその分析結果。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	昨年度に引き続き、広報イベントに関するアンケートを、Google フォームを利用して実施した。148名からの回答が得られ（対象：1年生）、分析結果を教授会で情報共有した。大学を志望するにあたってホームページを参考にしている割合が増加していることや、指定校推薦の学生の多くがオープンキャンパスに参加していることなど、広報イベントに対する影響力の動向を把握することができた。また、2024年度から編入試験を新規導入することを議決するとともに、指定校推薦の推薦基準を改訂し、学生の受け入れ体制を整備した。
	改善策	来年度もオンラインを利用したアンケートを実施し、広報活動の効果を調査する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	様々なイベントおよびアンケートが、本年度実施できた。それにより、対面とネットを利用した活動により広報イベントに対する影響の変化が把握できたことは極めて高く評価される。また、2024年度から編入試験を新規導入することを議決するとともに、指定校推薦の推薦基準を改訂し、学生の受け入れ体制を整備したことも高く評価される。
	改善のための提言	—
	評価基準	教員・教員組織
	中期目標	①生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。
	年度目標	教養教育担当の教員の採用により、英語、数学、物理、化学、科学実験、スポーツ健康科学の科目が生命科学部の専任教員によって担われることになり、バランスのとれた教養教育体制が整った。今後は、教養科目と学部専門科目との連携を強化するために教養・専門教育連携委員会を開催し、生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。
	達成指標	教養・専門教育連携委員会議事録、開催回数、および議論の内容の記録。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	第4回教養・専門教育連携委員会を開催し、教養教育と専門教育の連携についての問題点の共有や今後の課題について話し合った。また、教養教育担当の教員3名の昇格人事を行い、バランスのとれた教育体制を整えた。
	改善策	来年度も教養・専門教育連携委員会を開催するとともに、カリキュラム変更した科目の教育効果を検証し、生命科学部にふさわしい教養教育体制を整える。
	質保証委員会による点検・評価	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	所見	教養・専門教育連携委員会を開催し、教養教育と専門教育の連携についてその問題点や今後の課題を共有できた。また、基礎教育カリキュラム委員会を設置し、その提案に基づき生命科学部に適した教養教育体制を柔軟に整える体制を整備したことは高く評価される。
	改善のための提言	—
	評価基準	教員・教員組織
	中期目標	②充実した教職課程教育を遂行できる体制を整える。
	年度目標	2021年度教職課程担当教員の採用を受け、小金井3学部が連携して教職課程運用上の問題を共有し、対処するための組織として、教職課程連絡会議（メンバー：教職課程担当教員、相談員、副学長補佐、小金井3学部長、学務課職員）を立ち上げた。今後は、さらに連携を強化して実効性を高めるとともに、中高教員となった卒業生との連携なども図りたい。
	達成指標	教職課程連絡会議議事録、開催回数、および議論の内容の記録。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	教職課程連絡会議を開催し、教員採用試験の結果や教職を目指す学生の実態について情報共有するとともに、教職課程運用上の問題について議論した。
	改善策	来年度も教職課程連絡会議を開催し、充実した教職課程教育を遂行できる体制を整える。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	教職課程連絡会議を開催し、教職課程運用上の問題について議論したことは評価できる。
	改善のための提言	今後は、さらに連携を強化して実効性を高めるとともに、中高教員となった卒業生との連携などについても検討していただきたい。
	評価基準	学生支援
	中期目標	留学生に対する修学支援制度を確立する。
	年度目標	留学生との懇談会を対面で開催することが困難な場合には、オンラインでの開催を検討する。留学生に対して必要な修学支援に関する調査を行い、支援制度の確立を検討する。
	達成指標	留学生との懇談会の開催記録。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	4月に小金井留学生ガイダンスを実施し、学部長から留学生に向けて「授業について行けなくなったと感じた場合の対処法」という内容のアドバイスを送った。留学生との懇談会は新型コロナの影響もあり開催を自粛したが、Hoppiiを用いた修学支援の呼びかけを行った。
	改善策	引き続き、留学生に対する修学支援を継続する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	小金井留学生ガイダンスを実施し、アドバイスを送ったことは評価できる。また、留学生にHoppiiを用いた修学支援の呼びかけを継続的に行った点は評価できる。
	改善のための提言	Hoppiiを用いた留学生への修学支援の呼びかけを行うことは、継続的に行うよう検討していただきたい。また、留学生の状況を把握することも含めて、コミュニケーションをとるためのオンライン懇談会等の開催も検討していただきたい。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

評価基準	社会連携・社会貢献	
中期目標	学外へ向けて研究・教育活動の紹介を促進する。	
年度目標	外部参加者のいるセミナー、展示会、学祭における研究室紹介を活発に行う。特に、学生における研究室紹介の補助金の継続を要望していく。また、ホームページによる研究・教育活動の紹介の促進にも着手する。	
達成指標	アンケート調査の結果、紹介活動の例数。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	外部参加者のいるセミナー、展示会、学祭における研究紹介の回数は30回であり、昨年度(20回)よりも大幅に増加した。また、ホームページによる研究や教育活動の紹介、受賞や論文のプレスリリースを5件行った。
	改善策	引き続き、ホームページを活用することによって、学外へ向けた研究・教育活動の紹介を継続する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	外部参加者のいるセミナー、展示会、学祭における研究紹介の回数が大幅に増加したことは評価できる。また、HPによる研究や教育活動の紹介、受賞や論文のプレスリリースを積極的に行った点は評価できる。
改善のための提言	次年度も外部への研究紹介、HPにて積極的にプレスリリース等をおこなない、研究・教育活動を広報していただきたい。	
【重点目標】 教育課程・学習成果 昨年度まで、新型コロナウイルスの影響によりオンデマンドやオンラインでの授業が余儀なくされていたが、今年度は感染状況に配慮しながらハイフレックス授業や対面授業の拡充を図る。また、一部理系教養科目を改編し、リメディアル科目、新たな理系教養科目の新設を目指す。 【目標を達成するための施策等】 授業公開を実施して、授業の方法や工夫について相互に参考にできるようにする。同時に授業実施方法について把握して、各授業形態の利点と問題点を精査する。また、生命科学部基礎教育カリキュラム委員会を開催し、リメディアル科目や新たな理系教養科目の新設を目指して議論を行う。		
【年度目標達成状況総括】 新型コロナウイルスの影響が続く状況下であったが、多くの授業でハイフレックス方式や対面形式が取り入れられ、学習効果の改善が図られた。リメディアル科目や学部共通科目のカリキュラム変更を実施するとともに、教養教育担当の教員の昇格人事を行い、生命科学部にふさわしい教養教育体制を整えた。また、広報活動に関するアンケートをオンラインで実施し、その結果を分析することによって、広報イベントに対する影響の変化を把握した。さらに、2024年度から編入試験を新規導入することを議決するとともに、指定校推薦の推薦基準を改訂して学生の受け入れ体制を整備するなど、多くの項目で年度目標を達成することができた。		

#### IV 2023年度中期目標・年度目標

評価基準	理念・目的
中期目標	生命科学部では、自然科学の知識を基盤として多様な生命科学を学ぶことができることを、在学生および受験生と保護者などに対して周知する。
年度目標	学部および各学科のホームページのリニューアルや更新により生命科学部の魅力を広く周知する。新入生アンケートや学生モニターを活用し、広報活動の検証を行う。
達成指標	ホームページのアクセス数および学生モニターの回答

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

評価基準	内部質保証
中期目標	自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割をより明確に分けた現在の体制を維持し、厳格なPDCAサイクルを行う。
年度目標	執行部会議および質保証委員会を定期的を開催し、内部質保証のPDCAサイクルを実行する。
達成指標	執行部会議および質保証委員会における内部質保証の検討記録
評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標	教養科目と専門科目の連携を強化すると同時に、カリキュラムを見直し、リメディアル教育など新しい科目を導入することで、理系基盤教育を充実させる。
年度目標	新設されたリメディアル科目の教育効果の検証に着手する。
達成指標	執行部会議および生命科学部基礎教育カリキュラム委員会におけるリメディアル科目の検討記録
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標	対面とオンライン両方の利点を組み合わせた新しい教育・学習形態を確立する。
年度目標	新型コロナウイルス共存下の対面授業におけるオンライン教材の活用法を検討する。
達成指標	執行部会議および教室会議におけるオンライン教材の検討記録
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	学習の総合的な結果である研究成果を対外的に発表することを促進する。
年度目標	学外行事（学会・研究会・イベント等）への学生の参加を促す。
達成指標	学外行事への学生の参加回数
評価基準	学生の受け入れ
中期目標	広報イベントを通じた受入方針の周知について、効率のよい方法を確立する。
年度目標	アンケートを実施し、広報活動の効果を検証する。
達成指標	執行部会議における広報活動に関するアンケートの分析記録
評価基準	教員・教員組織
中期目標	①生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。
年度目標	教養・専門教育連携委員会を開催し、教養科目担当教員と専門科目担当教員の意見交換の場を継続・強化する。
達成指標	教養・専門教育連携委員会の活動記録
評価基準	教員・教員組織
中期目標	②充実した教職課程教育を遂行できる体制を整える。
年度目標	教職課程連絡会議において教職課程教育の充実に向けた検討に着手する
達成指標	教職課程連絡会議の活動記録
評価基準	学生支援
中期目標	留学生に対する修学支援制度を確立する。
年度目標	留学生に向けた修学支援の呼びかけや教員とコミュニケーションをとるための施策を検討する。
達成指標	執行部会議における留学生支援の検討記録
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	学外へ向けて研究・教育活動の紹介を促進する。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。



年度目標	一般公開セミナーを開催し、研究・教育活動を発信する。ホームページでの広報活動を促進する。
達成指標	セミナーの開催回数およびホームページで公開された研究活動の紹介回数
<p>【重点目標】 新規開講したリメディアル科目（入門数学、入門物理学、入門化学、入門生物学）の教育効果の検証に着手する</p> <p>【目標を達成するための施策等】 担当教員、執行部、生命科学部基礎教育カリキュラム委員会が協働し、新設されたリメディアル科目の履修状況を調査する。また、履修前のプレースメントテストと履修後のアチーブメントテストの成績を比較する。</p>	

### 【大学評価総評】

<p>全体的には評価基準の各項目について、適切な目標と指標の設定によって、着実、堅実に学部運営を進めている様に見受けられる。</p> <p>特に教育課程・学習成果における初年次教育・高大接続への配慮について、リメディアル科目の開講を含め、手厚い対応が実践されていること、さらにアセスメント・ポリシーに基づき学習成果を定期的に検証する仕組みなど、は高く評価される。</p> <p>一方で、（今年度の年度目標にも掲げられているが）これらがどれくらいの教育効果を発揮しているのか、定量的な検証をすることが PDCA サイクルへ繋がる第一歩でもあることから、ぜひ効果的な検証を期待したい。</p> <p>同じく教育課程・学習成果において課題として認識されている大学院進学率についても、学科ごとに様々な取り組みが実践されており評価される。</p> <p>学生支援における学生の能力に応じた補習教育、補充教育、成績不振学生への対応、外国人留学生の修学支援などについても、手厚い対応が実施されており、評価される。</p>
---

### 【法令要件やその他の基礎的な要件の充足状況の確認】

2023年度自己点検・評価シートに記載された Ⅱ自己点検・評価（1）点検・評価項目における現状を確認	法令要件やその他の基礎的な要件が充足していることが確認できた
＜法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない項目＞	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。